

はじめに

本書は、平成5年度から6年度にかけ、文部省重点領域研究「総合的地域研究の手法確立」の領域B02「地域連関の論理」に属した公募研究「東南アジアと冷戦」班の報告である。

領域課題の「地域連関」にことさらに引き寄せるわけではないが、冷戦は、今日に至る東南アジアの歴史上、同地域を域外・域内の両面で「連関」させてきた数ある力学や契機の中で、おそらくは最も生々しく、むき出しの、力づくの、そしておそらくは最も大量の流血を伴った部類に属するといえるだろう。世界的にみても、ベトナム戦争へと激化した東南アジアの冷戦が、冷戦史上もっとも「熱い」戦いであったことも今日では周知のところである。アメリカが東南アジアの共産化阻止に乗りだしたそもそもの背景に、日本を防衛することがかなり重要な動機として存在していた点も、日本人としては改めて心にとどめておくべきかもしれない。

共産主義国は幾つか存続しているものの、ソ連崩壊以前にあったような意味での冷戦は既に終わった。そして、冷戦期には世界で最も「熱い」戦いの舞台となった東南アジアは、ポスト冷戦の今日、各種の紛争に依然苦しむ世界全体の中で、相対的にみる限り、政治的安定と経済パフォーマンスの点で好成績を収めている。まがりなりにも域内の協調を独自に模索し続け、地域としてのビジョンを自主的に世界に向けて発信している点でも異彩を放っている。冷戦期の負の遺産をいまだにひきずり、或いは冷戦崩壊後の混乱にいまなお苦しむ旧ソ連や東欧とは対照的といえよう。それでは、ベトナム戦争に代表される東南アジアの冷戦は、同地域にとって一過性の悪夢、一時の徒花だったのだろうか。元来はヨーロッパ起源の冷戦が、その主役である域外の超大国とともに、東南アジアにずかずかと乱入して荒し回って帰っただけなのか。

そういう面は確かにあった。しかしそれだけではあるまい。東南アジアの冷戦は、域外の超大国やイデオロギーの他律的な関与と撤退という面がある一方で、同地域の人間による主体的な選択と応答の過程でもあり、或いは両者の交錯の所産であったと言えるように思う。冷戦がその存立を根底で担保してきた国内・域内の政治経済上の特質（例えばASEAN、権威主義的な開発志向体制など）にしても、冷戦の終わった今日に至るまで東南アジアの秩序に抜き難く内実化され、一部は積極的な或いは意味付けてきた再編さえ試みられている。こうした観察は当たり前といえば当たり前かもしれないし、常識的な観察でもあろう。しかし、東南アジアが冷戦の発祥地にして「主戦場」であった欧州から遠く離れ、また同地域の「熱い」冷戦に対する域外超大国（特にアメリカ）の関与が見るからに派手で大規模であり、東南アジア諸国が

超大国に比べればパワーが小さいという事実ばかりに目を奪われて、東南アジアの冷戦は「他律的」だったとみる誘惑につい駆られやすいだけに、以上の点は絶えず念頭におくべきだろう。「大国－小国」の関係が、常にこの順番で「主体－客体」、「主役－端役」とは限らない。域外の圧倒的な力学やイデオロギーの波及が、域外由来だからといって、いつでもどこでも「他律的」とはいえない。冷戦という域外由来の力学の波及と撤退に関し、東南アジアがそれにどのように応答し、それをどのように摂取し、消化し、国内・域内向けにどのように翻訳し加工したか、本書がこの問題に対する十全な回答というつもりはないが、班員の全員がこの問題を抜きにしては東南アジアの冷戦を語ることはできない、ということを知りて銘記してきたことは付言しておきたい。本書所収の論文に、専ら域外超大国とりわけ米国サイドの解釈に偏しているとの印象を与える面が仮にあるとしても、以上のような了解を基本的前提として共有していたことを、誤解をさけるために申し添えておく。

本書は、タイトルも示す通り、専ら米国側資料に依拠してベトナム戦争への米国の介入を重点的に論じる内容となっている。本研究班の課題でもある「東南アジアと冷戦」をめぐる論点の一切合財が、「ベトナム戦争論」の枠内に縮減して回収できるとは毛頭考えないし、ベトナム戦争じたいアメリカの政策形成過程だけで語り尽くせないことも承知しているが、この戦争を考えることで、東南アジアの冷戦（特に冷戦期アメリカの東南アジア関与）が少なからず照射され、演繹できることもまた争い難いであろう。本書の二論文もこうした認識の下に書かれている。東南アジアの冷戦（その前史と後史も含め）を構成した多くの局面が、本書所収論文で十分には取り扱われていない、という予想されうる批判を肯定した上で、あえてベトナム戦争に力点を置いたゆえんである。

最後になったが、本研究班の成果報告が大幅に遅れ、本重点領域研究の関係者一同に多大のご迷惑をおかけした。その責任はひとり本研究班代表者であった木之内にある。にもかかわらず常に暖かいご協力を惜しまなかった関係者各位に、改めて厚く御礼申し上げます。本書は諸般の事情および編者（木之内）の不幸により、班員全員の論文を収録するには至っていない。しかし「東南アジアと冷戦」への班員の関心が、本書をもって終息したわけでは勿論ない。本書執筆者を含め、班員全員がこの課題を、機会を改め、そして繰り返し今後も問い直していくことになるであろう。

1997年1月 木之内 秀彦